
椅子取りゲーム 電車編

水守中也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

椅子取りゲーム 電車編

【Nコード】

N6965N

【作者名】

水守中也

【あらすじ】

帰りの電車の席を巡って、二手に別れて争う少女たちの話です。

1、発端

「ねえ。電車を待っている位置、ここでいいの？」

きっかけは、古屋あんりの一言だった。

「えっ？」

中島三月は聞き返して、頭上の電光案内板を見た。

日曜日の夕暮れ。友人三人と電車に乗って都会へ行き、映画、水族館、食事にウインドウショッピングと楽しんで、駅で帰りの電車を待っているときであった。

待っている電車は「10両編成の四ドア車 普通 本越行き」

続いて足元を見る。「四ドア車 停車位置」

「……ここでいいと思うけど」

「そーじゃなくって。休日の夕方、帰り時で、都会から住宅地方面への下り列車だよ。なにも考えずに立って待っているだけだと、座れるかどうか微妙なのだ」

あんりは座って帰る気満々のようである。確かに日中街を歩き回った足で、地元駅までの約三十分、揺れる電車の中で立ち続けるのはつらい。

実は三月も席が空いていたら、それが一人分のスペースでも、友人三人を押しつけて座るつもりだった。しかし、こうあんりの「座りたいパワー」を目の当たりにすると、つい反対のことを言ってみたくなるのが人情と言うものだ。

「それが？ いいんじゃない」

「その『いいんじゃない』は、座れなくってもいいってこと？ それともこの位置なら絶対座れるから移動しなくてもいいってこと？ どちらかしら？」

友人三人のうちのもう一人、佐々木真美子が、勘ぐるような口調で聞いてきた。

実のところ、座れなくてもいいや、の気持ちで言った言葉だったが、真美子の挑発的なセリフに、三月は答えた。

「座れるってことだよ」

勢いでもあてずっぽうでもない。何となくこの位置なら椅子に座れる気がする。——そう、神のお告げみたいなものがっ。

「ふーん。ならあたしは移動するわよ。ここだと確かにあんりの言うように微妙だから」

「まさか、真美子も座りたいわけ？」

真美子は、この南小六年生、四人組のメンバーの中では一番大人っぽい。つやつやした下ろした黒髪はシャンプーのCMのごとく、シンプルなTシャツジーンズ姿は、かえって彼女の魅力を引き立てている。成績も優秀で、容姿とともに中学生でも十分通用する。

そんな大人な彼女は正直に答えた。

「まあね。疲れたし」

ちなみに、メンバーの中では3月生まれの三月が一番年下である（まだ11歳）。

「よしっ。じゃあ勝負だあ」

突然、あんりが大声を上げた。実はそれなりのお嬢様で、普通に着こなしているキャミソールとレギンスもなにげにブランド物だったりする彼女だが、深窓のご令嬢といった雰囲気は、かけらも感じられない。活発な性格で、三月とはボケ・つつこみ関係なく馬鹿話をする間柄である。

「勝負う？」

「そう。これから、私と三月とまみっちが三つに分かれて、電車に乗り込むの。そして誰が一番早く長く座れるかを争う勝負なのだ」

「面白いじゃない」

いつもクールなツツコミ役の真美子も、珍しく乗り気だ。

こうなったらもう、三月も後には引けない。

「よし、やってやるうじゃん」

「あのお……三人って、私は？」

取り残された四人組最後の一人、白石美姫がおずおずと口をはさむ。薄桃色のワンピース姿が愛らしい反面、弱弱しさを感じさせる少女である。

あんりが即答した。

「姫ちゃんは審判。電車内を行き来して、誰がいつどのくらい座っていたか調査して報告するのっ」

「ええええっ……じゃあ私は座れないの？」

美姫も座りたかったようである。けれど、貧乏くじを引くのが美姫と言う人物なのだ。

「てなわけで、決定っ」

「しくしくしく」

こうして、勝負は始まった。

1、発端（後書き）

大したオチも待っていませんが、一万字を超えそうなので、連載という形をとりました。

2、開戦直前

一人残された中島三月は、再び電光掲示板を見上げた。

「10両編成の四ドア車 普通 本越行き」。掲示板に書かれた到着予定時刻は、隣にある時計が示す時刻の三分後。いやあの時刻は到着じゃなくて出発時刻なのか？

ここが座れそうだと、言った手前、三月は動けない。

真美子は迷いもせずに、ホームの先頭方向へ移動した。あんりは、審判にされた美姫を引き連れて、ホームに来る前上がってきたエスカレーター付近に戻って行った。

三人の行動を見つめながら、三月は、とりあえずお告げのあった神に祈ってみたりした。

……五秒で止めて、辺りをうかがう。休日帰り時のホームに人はたくさんいる。三月の前にも、すでにカップル二組が並んでいる。彼女の後ろにも結構な人が続いている。

今頃移動したあんりや真美子はこの後ろに並ぶのだから、留まった自分は案外有利かもしれない。

「うっっ」

と内心ガッツポーズしたところで、ホームに軽快な音楽が響き、間もなく列車が到着すると、アナウンスが流れた。続いて列車の音が聞こえて、目の前を、勝負の舞台が横切る。

（しまったっ）

流れ行く車中をうかがうと、思ったより空席が目立つ。これでは先頭に向かった真美子がいきなり有利だ。

しかしいまさら移動するわけにも行かない。ただ運命を天に任ずのみ。二両目・三両目………どんどん空席がなくなり、立ったままの乗客の比率が上がる。そして真ん中の五両目二番目のドアが、三月の目の前に止まった。

扉が開いたら、前にいるカップルの赤い糸を斬り裂いてでも車内

に飛びこんでやる、と意気込みながら、スタートを待つ。
空席は、どこだっ？

しまった、と佐々木真美子は舌打ちをした。

ホーム先頭には、すでに待ち人の列ができていた。

階段や売店から離れたホームで待つ乗客は、他の位置に比べ少ないはずだった。

だが、あんりや三月よりまともな知識を持つ者なら、考えることは同じようだった。競争率の低さを狙い、多少の移動を犠牲にして座席を得るという考えを持った同志が、すでに多数並んでいた。電車到着直前に移動したことも致命的だった。

（後悔していても始まらないわね）

とりあえず最後尾に並んで待つ。だがこの位置では、例えば席が空いていても座れるかどうか定かではない。

真美子は思考を巡らせた。なにか裏技はないか？ 真っ先に思い付いたのは、禁断の秘儀、割り込みだった。

いやいや、と真美子は首を振る。

あんりなら、社会ルールなんかわかんない、みたいな、アホな小学生になりきって割り込むかもしれない。だがそのようなルール違反を……それ以前に、あんりがやりそうなことを、自分が実行するのはプライドが許さない。

仕方ない。気に入らないが、電車が到着するまでは天の流れを託そう。知恵を絞る機会はまだ先にある。

列車到着のアナウンスが流れる。先頭だから電車が止まるまで車内の乗客数は分らない、

真美子は軽く瞳を閉じて待った。

さてと、どうかしらね？

古屋あんりと白石美姫は、エスカレーターでホームまで上がってきた位置に戻った。そこはすでに長蛇の列だった。しかも下からエスカレーターでホームに上がってくる乗客予定者が、どんどん増えてくる。

「なんか人が一杯だね……」

美姫が尻込みしている。確かに、これだけの人が乗ったら満員電車になってしまうだろう。

だが美姫とは対照的に、あんりは自信満々の様子を見せる。

「ふっふっふ。大丈夫なのだ。文明の機器エスカレーター付近は、乗る客も多いけれど、降りる客も多いんだよ。日本人は皆ぐーたらだからねえ」

「けど……人がたくさん降りても、こんだけの人が乗り込んだら、やっぱり一杯で座れないんじゃない……」

美姫のもつともな指摘に、あんりは首をかしげる。このままだと美姫はどうでもいいけど、自分も座れないかもしれない。

「うーん。それもそうだねえ……そうだっ。ここはやっぱり、まみっちみたく、うんちくを述べて先頭に割り込むかな」

「ダメえー。真美ちゃんはそんなことしないし。割り込みしたら、ふーちゃん、失格にするからねっ」

そんな会話をしていたら、構内にアナウンスが響き、電車が入ってきた。

見ると、意外と先頭車両の席が空いている。これはいきなり真美子が勝利か？ けど同じ所で待って座れてもつまらないので、後悔はしていない。その代わりに、駅から出たら、力を温存した真美子におぶってもらおう、なんて考える。

むしろ敵は三月である。彼女の待ち位置付近、つまり元いた場所は、予想通りビミョーな感じだった。

そしてあんりたちの前は……やはり一番人が多い。

あんりは瞳を輝かせ、わくわくしながら扉が開くのを待った。

さあて、何人の人が降りるかなあ。

3、開戦

真美子は自分がまた一つミスを犯したことに気付かされた。

並んでいる一番先頭のドアは、扉から入ると、左手に席があり、右側は運転席だ。一つ後方のドアなら、前後左右に席がある。これは単純に考えても二分の一の損失だ。

停車寸前の列車の中には、空席がちらほら見られた。しかし自分の前に並ぶ人の列。車内の様子を観察するに、降車客の数は多くない。

案の定、扉が開き真美子が車内に足を踏み入れたときには、近くの席は全部埋まってしまっていた。

「仕方ないわね……」

真美子はスタートでの着席を断念した。だが他の二人も座れるとは限らない。それに審判は美姫だ。いざとなったら彼女に、あたしの勝ちを宣言させればいいだけだ。

もともと、裏技を使わなくても勝算はある。

ここから三つ先の八丁駅。あそこは、駅の出口がホーム先頭にある。つまり、その駅で降車予定の客は、楽するため、先頭車両に乗っているのだ。駅に着けば、現在座っている客のかなりが席を立つはず。そこで勝負^{けり}をつける。

三月はいら立っていた。

お降りの方から先にお進みください、と言う生易しいアナウンスを盾に、ぞろぞろと、彼女の気も知らない乗客がゆっくりと降りてくる。

三月は脇から入り込もうとしたが、カップルが邪魔され、正攻法で突っ込んだら、降車客に押し戻された。……無念つ。

それでも、ようやく降車客が少なくなったところで、前を押し

けるように、車内に乗り込むことに成功した。

すかさず席を確認。元から少なかった空席のほとんどは、出遅れたせいで、隣の扉から入った客に先を越されてしまっていた。

だが、三月はひとつの隙間を発見した！

あった。左奥の三人がけのシート。その真ん中の席が空いている。左右に座っている人の体型が、少し大きめ（つまり太っている）ので、スペースが小さいから敬遠されているのだろう。しかし子供（都合のいい時だけ子供となる）である自分にとっては余裕の空間。ビバ小学生っ。

周りに立った乗客がいるけど、座ろうとする気配はない。三月はやる気持ちを抑えて、ゆっくりとその席へと向かい——衝撃の事実を目の当たりにした。

『優先席』

それは、お年寄り・身体の不自由な方・妊婦さんのために、電車協会（？）が用意した特等席。健康体である三月に座ることの許されない席だった。

さて、どうする？

列車が止まった。目の前のドアの向こうには、降車客が殺到してかなりの数だ。隣の美姫は圧倒されおびえているが、あんりにとっては好都合。降りれば降りるほど、席は開くのだ。

降りようとする人間と乗ろうとする人間が、ドアを挟んで対峙する。決闘前の睨み合い。ドキドキする。

「よね？」

「何が？」

美姫が瞳を白黒させる。

などとやっていたら、扉が開いて、開戦。人があふれ、とても中の様子は見えない。割り込みしようとしても、降りてくる人に邪魔される。それどころか、後ろから美姫に服をつかまれて行動に移す

ことさえできなかった。

あんりは天を仰いだ。

「何ていうことなのだ。審判に妨害されるなんて？　これがアウエーの洗礼と言うもののなのかつ」

「割り込みはだめっ」

てなわけで、すっかり出遅れてしまったあんりたちが乗り込むころには、ドアの前には、もう座るのあきらめました、もしくは次の駅で降りますんで、みたいな人たちがたむろしていた。それらを押しつけて、奥の座席前まで移動したけれど、すでに客で埋まっていた。おばさんなみのパワーで割り込もうにしても、そのスペースすら見当たらない。

完敗だ。あんりは、ちらりと隣的美姫を見る。彼女も座れなくって落胆しているようだ。そんなことはどうでもいいけど、美姫は審判なのだ。つまり彼女が証言すれば、白もピンク色になるのだ。座れなくても、三月と真美子に勝てるチャンス。

「姫ちゃん。あめ食べる？」

「……もしかして、買収」

「うん」

「買収はダメだけど、あめは貰うね」

「ああ、姫ちゃんが高等な技をっ」

ひよいぱく、とあめだけ食べられてしまった。まいっか、のど飴だし。

「さあさあ、姫ちゃんは移動だよ」

「ふえ。ろうして？」

「審判なんだから。まずは三月のところだよ」

美姫の背中をぼんと押す。ちょうど列車が小さく揺れたせいで、美姫の身体は大きくよろけたが、そこは彼女らしく、責任を持ってしっかりと三月の様子を見に、隣の車両へと移動していった。

「さて、と」

審判の目がなくなっただけで、あんりは携帯電話を取り出した。

4、優先席

そのころ三月は——優先席にちゃっかり座っていた。

座るために体の不自由な人もしくは妊婦さんのフリをしようとしたが、無理っぽいので、やめた。けど、あくまで「優先」席なのであって、指定席ではないのだ。周りに優先される人がいなければ、座ったって問題ないはず。

現に見よつ。左に座っている太ったおばさんは健康そうだし、右のおじいさんだって、きつと「おじいちゃん」じゃなくて「おじさん」って呼ばれたいお年頃に違いないつ。

そう決め込んで、三月はその二人の間に座り込んだ。一応「あー疲れた」と呟いたり、自分の肩を叩いたり足をもんだりしつつ。これに関しては、実際街中を歩き回って疲れているのだから、嘘じゃない。

ほっと一息ついて、問題は次の駅だ。向かいの優先席には、それらしい人が座っている。もし次の駅で優先されるべき方が乗ってきたら、どかなくてはいけないのは、三月なのだろうか？

いや、お前がどけ。

とばかりに、隣のおばさんを睨んだけれど、はじき返された。その面の厚さと言ったら……ダメだ年季が違う。かなわねえ。

りりりりりーん。

突然、ポシエットの中の携帯（着信音「黒電話」）が鳴った。

「あわわわ……」

慌てて携帯を取り出す。近頃電車での携帯使用も多少緩和されてきた感じもあるが、優先席付近での使用は厳禁。

着信表示を見ると「ふーちゃん」。

あんりからだ。やつも同じ電車に乗っているはずだろうに。もしかして、乗り損ねたのかな？

とりあえず話してみることにした。もちろんかがみ気味に小声で。

隣のおばさんの視線が痛い。

「……もしもし」

「あ、三月。元気い？」

「元気い？ じゃないっ。あんたも電車に乗ってるの？」

「うん。あ、今近くのおじさんににらまれたから、ちょっと移動中なのだ」

移動中。つまりあんりは座れなかったということか。うしっ。

「私は座ってるよ。んじゃ、切るから」

「えー。もっと話そうよ。つまんないもん」

「だめ」

「えー。じゃあメールでも」

「うっ……それも駄目っ」

「……もしかして、三月、優先席？」

ぴっ。慌てて携帯をきる。だが、ほとんど間もなくまた掛けてきやがる。仕方なく電源を切った。優先席前では携帯電話の電源を切ること。私は常識に生きる女よっ。

ちらりと辺りをうかがうと、おばさん以外にも痛い視線がちくちく。

次の停車駅を示す車内アナウンスが流れる。

もう一度回りをうかがう。座っている乗客の中に、降りようとする人は見当たらない。しかも、電車が止まると、見るからに高齢者な人たちが、乗り込もうとしているではないか。付け加えるなら、視線は明らかに三月を見ている……気がした。

仕方ない、とあきらめる。私は、鉄の心臓を持つ真美子でも、馬耳東風な心臓を持つあんりでもない、普通の女の子なのだ。

三月は次の駅で降りるフリを見せながら、優先席を立った。

止まった電車が再出発したところ、揺れる電車以上に揺れながら、律儀に美姫が現れた。

「あ、三月ちゃんも座れなかったんだ」

「いや、さっきまで座ってたんだけど」

「でも、今は立っているよ」

「ええと、さっきまで優先席に……」

説明しようにも、さっき自分が座っていた席には、予想通りお年寄りが座っている。周りの人に、さっきまで優先席に座っていましたよね？ と証明してもらうのは恥ずかしいし、真面目な美姫に白い目で見られてしまう気がする。

「えーと、三月ちゃんも座れず……と」

律儀にメモ帳にメモをする美姫。

「じゃああたし、真美ちゃんの様子も見てくるから」

美姫はふらつきながらさらに先頭車両に向かった。

三月は、はじめてのおつかいを見守る母親の気持ちに共感しつつ思った。

なんか無理があるよなあ、この勝負。まあ、ふーちゃんが考えたものだし。

5、死闘

「……ちっ」

真美子は小さく舌打ちした。

最初の停車駅は通過した。

不便な先頭車両からは、やはり乗客はほとんど降りなかった。むしろライバルが増えたくらいだ。そういえば、終点の本越駅も出口は一番前にあったはず。まさか座っている人どもの狙いは、そこか？

だとしたら、八丁駅下車をのんきに期待するのは危険だ。やるべきことは、座っている人間の中から、八丁駅で降りる乗客を見つけ出し、その前に移動すること。この際、間違つて本越駅まで行く人の前に立つたら、終点までに立ち続けることになる。読みが試される。もちろん移動の際には、新たに加わったライバル（立った乗客）を上手くけん制して、好位置を確保しなくてはならない。

ライバルのいない座席の前列の前に立つて、真美子は目の前の乗客を観察する。

子連れの母娘。靴を履いたままひざ乗りで外の景色を見ているガキが気になるが、彼女らは一セット。もし降りるとすれば、大スペースだが、自分ひとり座れば良いので、あまり意味はない。

その隣は、子供の愚拳を快く受け入れている（ていうか爆睡中）の中年男性。この爆睡ぶりを鑑みるに、次の次の八丁駅で目覚めるとは、考え難い。

その隣は、女子高生三人組。奇妙な言語でお喋りしている。休日で部活帰りとも思えないが、なぜか制服姿だ。その制服は、私立本越女子高等学校のものだ。高校生なのだから地元通学とは限らないが、他の駅より、本越駅で下車する確率が高いと思われる。

その隣は、女子高生の隣に座れて嬉しそうとも恥ずかしそうとも見える表情をしているオタク系。買出しに来たのだろうか。このテ

の男の行動は、あまり読みたくもない。

以上、七人がけのシートにしっかりと七人。なんとも望みの薄いシートのような気もするが、他のシートの前には、すでに立ち客が獲物を狙う目で待機している。今真美子がするべきは、このシートを自分のテリトリーとして守ることだ。

次駅に停車。誰も動くそぶりを見せない。他のシートも同様だったので悔いはない。数少ない乗車客は、ドア前に立ち、新たな脅威にはならないようだ。

いよいよ次は、運命の八丁駅。そのとき、神経質になっている真美子の元に歩み寄る者が現れた。テリトリーを犯す侵入者は何者かと思ったら、美姫だった。

「えーと、真美ちゃんも座れず、と」
律儀に審判をやっているようだ。

とりあえずライバルでないことを確認した真美子は、瞳で美姫を黙らせた。隙なく視線をめぐらし、乗客の一挙一動を見逃さない。
「次は、その……八丁駅だね。ここ先頭だから、たくさん人が降りるかな？」

無視していると、美姫の口から意外の一言が発せられる。
「……あたしも、もうちょっと待ってみようかな……？」

まさか、姫も狙っているのか？
それっきり美姫は無言。審判をするでもなく、真美子と同じように、目を配らせる。

次の停車駅を知らせる車内アナウンスが流れる。列車のスピードが落ちる。座っている乗客の一部が、そわそわと動き出す。目を覚ます者もいる。そして――

例の親子連れが動いた。娘に言い聞かせ、降りる準備を始めている。この駅で降りるのは間違いない。あとは、いつ彼女らが席を立って、その開いたスペースに入り込めるかが、勝負だ。

電車が止まる。親子連れが席を立つ。今だ！
後は無意識の行動だった。同じ席を目指し、美姫の髪を引っ張り、

服を引っ張られ……後から思うと、これが中年になったときバーゲ
ンで争う未来なのかと思うと、気分が悪い。

「はあはあはあ」

一人ぶんは幼児のスペースだったので、十分とはいえない広さだ
ったが、二人押し合うようにして席を確保した。もともと七人がけ。
女子高生どもが無駄に使っているせいで狭いだけで、問題はない。

真美子は、隣にくっつくようにして座っている美姫に尋ねた。

「審判はどうするの？」

「真美ちゃんの勝ち、ということぞ、おしまい」

「ふふ。まあ、良いんじゃないかしら」

微笑み会う二人。戦いの後に友情が芽生えた瞬間だった。

5、死闘（後書き）

まだ、あと一話続きます。
オチは見え見えですがw

6、終戦（点）

八丁駅を過ぎても、三月はいまだに立っていた。乗客に変化はほとんどない。

だからといって、座ることをあきらめたわけではない。勝負云々もあるけど、いい加減疲れたので、座らせて欲しい。座っている乗客の前で、思いつきり疲れた様子で、つり革にぶら下がって、瞳で訴えかけてみる。けれど子供がやっても、遊んでいるだけにしか思われない。差別だ。

こうなると、さつき譲ってしまった優先席のことが悔やまれる。

これもそれも、あんりの妨害のせいだ。

「呼んだ？」

「うわっ」

いつの間にか背後に擦り寄っていたあんりが、ナマケモノのようにつり革にぶらりとぶら下がっている三月の様子を楽しそうに見ていた。

「呼んでないし、声にも出してないし。そもそもなんで、ふーちゃんがこっちにきているんだよ」

「だって、姬ちゃんも審判に行ったきり帰ってこなくてつまらないし、私がいたところ、人がどんどん乗ってきて、全然座れそうにないんだもん」

「移動するのって、反則じゃないの？」

「どこであろうと、先に座ったものが、勝ちなのだ」

あんりが不敵に笑う。

勝手な言い分だが、対戦相手が隣にいたほうが、勝ち負けがはっきりしていて分かりやすい。燃える。

「よおし。その勝負、受けて立つ」

かくて勝負は一騎打ちとなった。

今までは、座れそうな席を探して待っているだけだったが、あん

りの登場で、騙し合いという要素も新たに加わっていた。

「ねえふーちゃん。あそこのお姉さん、次の駅で降りそうなの感じがしそうで、気がしなくてもない？ あっちに行ったら？」

「そうかなあ？ 私は、あっちのおじさんが、次の新床駅で降りる気がするのだ。三月にお勧めだよ」

「その理由は？」

「新床駅に住む、お父さんの妹さんのいとこさんの息子さんがあんな感じなのだ。きっと、お父さんの妹さんのいとこさんの息子さんの知り合いに間違いなしっ」

「もう一度言ってみ？」

「で、三月の根拠は？」

「うわっ、流したっ」

てな感じである。

「それなら、ふーちゃんがあのおじさんの前に移動したらいいじゃん」
「いえいえ、わたくしのような若輩者がとんでもないであります。みっちゃんさんにお譲りいたしますよー」

けん制しあっているせいでお互いに移動できない。自分たちは川神駅から乗っているのに、八丁駅辺りから乗り込んできた新参者に、空いた席を取られてしまった。

「あああ、もおっ。まったく、近頃の若いものときたら、先輩を敬う心はないのか」

「若くないじゃん」

あんりにつっこまれる。

「年齢じゃなくて、電車に乗っている時間の問題なのっ」

三月の論理も、長期戦によって破綻して来た。もともと大してまともじゃないが。

「ふっふっふ。三月の待ちの戦法は、無理があるのだ。ここは、攻めでないかないと」

「病人のフリをして優先席ねらいとか？」

三月がさっきやった技だが、あんりはその問いに、ちゅちゅちゅ、

と指をふる。

「甘い甘い。確かに、ありがちなで有効な手だけど、私たちには、無理があるよ。ここは逆に、小学生という属性を生かさなくちゃ」

「……で、具体的にはどうするの？」

「ずばり、孫が恋しいご老人の前に立つておねだり、もしくは口リコンそうなお兄さんの前で、色仕掛け」

「するなっ」

試しにと、怪しげな男の前に移動しようとするあんりの頭をはたく。勝手にやらせてやろうかと頭によぎったが、色仕掛けが成功してしまつたら、それはそれでしゃくだからだ。

そのときだった。

「おっ」

三月とあんりの小さな声がハモる。

座っている乗客に降りるそぶりが見えたのだ。読んでいた文庫本を閉じてかばんにしまう人、寝ている隣の友人をひじでつついて起こす人、窓の外をきよきよと見る人、などなど。

周りの立っているライバルたちも、扉へとそろそろ向かう。

このままの様子だと二人とも座れそうだが、勝負はどちらが先に座れるか、ゼロコンマを争う戦いなのだ。油断大敵。最後まで気を抜かない。

まだ電車は動いていたけど、ついに、二人の前の席が空く。

「おりゃーっ」

奇声とともに、ほとんど同時に座席に飛び込む。茶色のシートに、二人のお尻が付いたのも、全く同時だった。

ということは……

「引き分け、だね」

「まあ、今回はこういうことにしておこー」

二人は顔をあわせて、そう結論を出した。

長い戦いの末、二人とも疲労は限界に達していた。あとはゆっくりと座っていよう。ここは優先席ではないのだ。誰が来ても譲るも

のかつ。

最初は二人して身を寄せ合って座っていたが、座っていた人がほとんどん席を立つので、ゆったりと座席に、足と手を伸ばす。ここは極楽だ。

駅に止まって、客がぞろぞろ降りる。それはもお、気付くと車内にはあんりと自分と、ほんの少しだけになってしまいうらい。三月は疑問に思う。こんなに人が降りる大きな駅であつたっけ？

もしかして……ある予測が頭に浮かぶ。

「ねえふーちゃん。もしかして、ここ……」

「ん？ 終点の本越駅だよ」

さも当然、と言った様子であんりが答える。いつの間にか、降りる入野駅を四駅も飛ばして、終点まで来ていた。

かつかつと足音を立てて、車掌さんが、終点でこのまま車庫に入るから早く降りてくださいと言いながら、二人の前を横切った。

「どーして言ってくれなかったのっ？」

「だって、勝負の途中だったから。あれ？ もしかして、三月、気付いていなかった？」

「……うっ」

車掌に追い立てられるよう電車から降ろされた三月が時間を確認しようと携帯の電源を入れたら、そのタイミングを見計らったかのように、黒電話音が鳴り響いた。

「うーん。着いた」

入野駅のホームに降り立って、真美子は大きく伸びをする。繁華街はないが、駅の間隔が広く住宅街も広がっているので、夕方の帰宅時間は結構込み合う。急行も止まるし、くだらないと思いつつ、優越感を持っている。

改札に向かう人の流れに乗らず、身体を伸ばしている真美子の横

で、美姫はせわしく、改札まで走って行って、また戻ってきた。
「あのね、その……三月ちゃんとふーちゃんが見当たらないんだけど」

美姫は慌てているが、真美子にとっては想定内の出来事だった。
美姫がいなくなつて退屈になったあんりが三月の元に行く。中途半端な座れる可能性の少ない車両で、無駄に競い合っていたら、決着が付くのは……

「ねえ、どうしようか？」

「そうね。姫は携帯持っているわよね。十分後くらいに、電話してみたら？」

「……どうして、十分後？」

にやり、と真美子は笑った。

「電車内は、携帯禁止でしょ」

ちなみに、入野駅から終点本越駅までの所要時間は十分である。

6、終戦（点）（後書き）

お疲れさまでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6965n/>

椅子取りゲーム 電車編

2010年10月8日12時13分発行